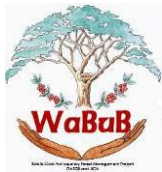


WaBuB PFM News

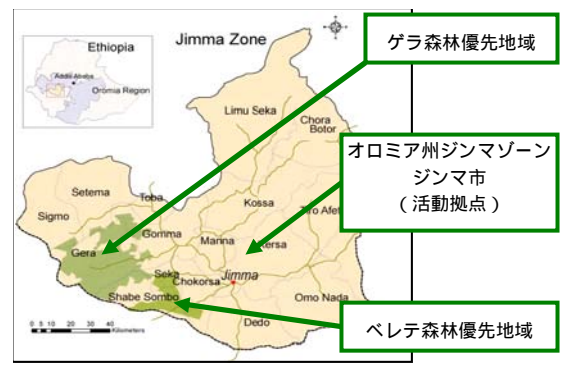
~ Respect Local People's Knowledge for Sustainable Forest Management ~



JICA 技術協力プロジェクト

エチオピア ベレテ・ゲラ参加型森林管理計画フェーズ2

2009年1月17日発行 (第25号)



WFS 農民の学校 卒業式！ ~ゲラの巻~

1年2か月にわたって毎週続けられてきた農民の学校 WaBuB Field School (WFS) が、とうとう卒業の日を迎えました。ゲラ郡では、12月13日および14日の2日に分けて行い、特に1日目にはこのハレの日を共に祝おうと、駒野欽一在エチオピア日本大使やギルマ OFESA (オロミア森林公社) 社長、佐々木 JICA エチオピア事務所長、オロミア州高官、FAO (国連食糧農業機関) スタッフなど、多くの方々が来賓として出席して下さいました。

この日を待ち望んだ WFS メンバーの卒業生達も全員がチラの町へ集結し、少し緊張した面持ちです。早速、卒業生代表のスピーチが始まり、農民の男女1人ずつが WFS で学んだこと、WFS を通じて自信になったなど、それぞれの想いを述べてくれました。普及員や来賓のスピーチの後、各グループが成果をまとめたポスターの発表です。WFS セッションの様子を分かり易く絵で描いたものや、WFS で収穫したキャッサバで作ったパンを紹介したものあり、各グループの個性が出ています。ローカルバンドによって編曲された「WFS の歌」も披露され、普及員や農民が踊りだし、徐々に緊張も解けてきたようです。WFS をファシリテートしてきた村落開発普及員の表彰の後、全卒業メンバーへ「農民エキスパート」の証書とTシャツ、そして WaBuB 帽子が授与され、盛況の中に1日目の卒業式の幕が下りました。この後、来賓の方々は森林コーヒーが豊富なアファロ集落を訪問し、ゲラの森の貴重さと森と共生しながら生計を立てる農民の様子を見てもらいました。

2日目は主だった来賓がアジスアベバへ戻ってしまって拍子抜けかと思いきや、緊張感無くリラックスした農民女性まで前に出て踊りだし、得意の小話合戦も行われたりと、大いに盛り上がりました。日本人代表としてスピーチをして下さった小川短期専門家からは、「あなた達の本当の卒業証書は何だかわかりますか？それは、あなた達の畑なのです。周りの農民に「これが自分の畑だ！」と自慢できるよう、これからも WFS で学んだことを活かし続けてください！」と、激励の言葉を頂きました。そうです、これから如何に学習成果を自分達の畑で実践できるかが大事なのです。

2日間にわたるゲラ郡の卒業式では、35の WFS グループから862名の農民が卒業を祝いました。WFS としての学習の機会は今区切りですが、この中、17グループがスタディ・グループ(卒業メンバー10名以上の有志により結成され、基金はプロジェクトとメンバーによる折半)として独自に学習を継続していきます。また、WFS の実施は生計向上活動の一環であると共に、この WFS を通じて培った組織力を WaBuB の森林管理に活かすことをねらいとしています。そこで、WFS 卒業生が今後 WaBuB の実働部隊として、森林モニタリングや管理計画作りなどの活動を引っ張っていけるよう働き掛けていく予定です。

卒業式から1週間後、農民ファシリテーターが実施する WFS を訪れました。ゲラ郡では58名の農民ファシリテーター(卒業生の中から試験により選抜、第21号参照)により、34の WFS が10月から新たに実施されています。この日に訪れたワンジャ・カルサ村のブルトカン女性農民による WFS では、野菜を植えるための苗床作りが行われていました。しっかりと4つのサブグループに分かれて土の準備やフェンス作りを分担し、各グループのリーダーがノートに記録をしています。WFS を通じて学んだ成果が、新たな農民メンバーへ確かに引き継がれている様子を見て、地に足をつけて確実に活動を行う農民の熱意と真剣さに胸を打たれました。これまで普及員が主に WFS をファシリテートしてきましたが、彼ら彼女らは常に異動して去っていく存在です。その一方、いつまでも残るのは農民です。如何に農民自身に根付く活動と能力向上を支援していけるのか、WFS の卒業を経てまた新たな挑戦が始まりました。(吉)



駒野大使による祝辞



来賓へ WFS の成果を発表



WFS の様子を絵で表現



卒業メンバー代表スピーチ



踊りだす普及員と農民



卒業メンバー記念撮影



WFS の成果はこれから

WaBuB は、現地オロモ語で(地域住民により組織される)森林管理組合の略称、PFM(Participatory Forest Management)は参加型森林管理の略称です。よって、WaBuB PFM は、本プロジェクトが確立・普及を目指す WaBuB による参加型森林管理方法を意味します。

WFS 卒業式！～シャベ・ソボの巻～

ゲラ郡での卒業式から1週間後、シャベ・ソボ郡のWFS19グループ、487名の農民を対象とした卒業式が実施されました。これまでのWFSの様子から想定して、ゲラに較べたら内気な農民が多い傾向があるし、あまり盛り上がりがないかも...と心配しましたが、いやいや驚きました。



ポスターに見入るジンマゾーン長

ゲラでの経験を参考にプロジェクトスタッフが入念にアドバイスをしたようで、当日の準備はバッチリです。すでに各グループのポスターも張り出され、農民も席について来賓の到着を待っています。成果と言うよりも絵ばかりが多かったゲラに比べ、シャベ・ソボは表やグラフでまとめたポスターが目立ちます。例えば、ニンジンに肥料を与えた場合と与えなかった場合を比較し、その際の労力やコスト、収穫量などの違いを分かり易く表にしています。また、アボカドをポットで栽培した場合と直播にした場合の成長の違いがグラフにされています。多

かれ少なかれ普及員がサポートしてはいるものの、メンバーが自分達で試験・記録をした結果を分析し、表やグラフで表現するという経験は、成果を分かり易く吸収できると共に、農業技術の向上に不可欠な観察・分析力の育成につながると考えています。

このようなポスター発表に、来賓の方々も真剣な様子で聞いています。農民代表や普及員のスピーチをしていると、いつの間にか観衆が膨れ上がります。どこからかジュースの売り子が現れ、簡易な茶店も開かれました。来賓席の裏では、いい機会とばかりに、保健事務所スタッフによるHIV検査まで行われています。シャベでこのような大きな催しが行われるのは始めてらしく、町中の住民が集まったようです。



特設HIV検査所



本当の卒業証書は？

卒業証書やTシャツの授与が終わると、ローカルバンドの演奏に合わせ、もはやダンスパーティーの勢いです。護衛役の警官もお手上げの様子で、子供達が次々に会場へ乱入、汗びっしょりになりながら踊っています。子供たちにとっても、こうした楽しみは初めてで、じっとしていられないのでしょう。收拾がつかない状況になりながらも、主賓のジンマゾーン長は「こんなに盛大で素晴らしいセレモニーは初めて見た。このような成果を上げたプロジェクトと関われることを、実に誇りに思う...」と、ありがた

たいお言葉を頂きました。来年も今年以上の卒業式ができるよう、普及員や農民と協力して、第2ラウンドWFSも常により良い成果と変革を追求していきたいと思えます。(吉)



子供達が乱入！

JICA 新人職員研修～山中職員より～

JICA 新人職員研修として、11月末から1ヶ月、当プロジェクトにお世話になりました山中祥史(やまなか よしふみ)です。滞在時期がちょうどコーヒーの収穫期にあたっていたため、少し森の中に入れば原始の森林コーヒーが赤い実を光らせているのをこの目で見る事ができました。それは、まるで森の中の宝石のようでした。



赤く色づき始めたコーヒーの実。森の宝石！

この1ヶ月の研修期間、主にベースラインのデータ整理・分析の補助を担当させていただきました。約400戸の農家からの調査内容は、ベレテ・ゲラの森林にすむ農民たちの生活状況を浮き彫りにするに違いないと意気込んでデータ分析に臨んだものの、データの扱いの難しさに直面するばかり。地域によって違う面積の単位、アムハラ語とオロモ語の表記の混在、そして村ごとで微妙に違う作物の名前など...。ナショナルスタッフの知識を借りても、整理しきれない部分も出てきて大変です。また、データと睨めっこしているだけでは、農家のイメージは鮮明にはなってきません。実際に農家を訪れ、畑の様子を見て初めて、データの表している畑の使い方、植えている作物の種類というのがデータの向こう側に見えるようになってくる気がします。むしろ、ある短期間だけを見ても、年間を通した農家の実態を知ることはできないと思います。それでも、このベースラインをうまく分析し、実際に見た畑のイメージを少しでも正確に伝えられるような結果を作れたらいいな、と思います。

その他にも、WFS や卒業式等、プロジェクトの沢山の活動を体験させていただきましたが、中でも印象に残っているのは農民ファシリテーター主導のWFS(1ページ目参照)を訪問した際に、フィールドコーディネーターが発した言葉です。「農民主導だからこそ、改善すべきニーズに挑戦できるんだ！彼らは貧困と闘っているんだぞ！」そう語る熱い目と表情...正直、同年代の彼を前に、身震いするほど感動しました。

また、プロジェクトがぶつかっている課題に対し、日々過酷な生活環境の中、試行錯誤挑戦している専門家方の姿も知ることができました。個人としては大した役には立てませんが、JICA 職員として、しっかりと現場を見て、プロジェクトの中のスタッフや専門家と一体感を持った仕事のできる職員になろうと決めました。この貴重な一ヵ月、ご指導下さいまして誠にありがとうございました。エチオピアの数少ない森林と、コーヒーを始めとする森林からの多くの恩恵が、農民たちの手によりしっかりと守られている姿を、数年後、十数年後も、再びこの地、この目で見られることを切に願って...(山)

